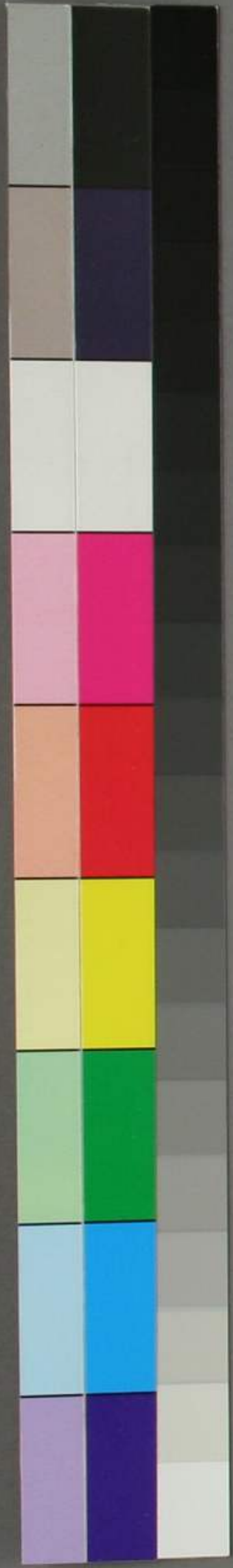


海外異聞

二

出所	著者	冊數	第
		共 五 冊	號
		海外異聞	
		二	

ル 9
3054
2





海外異聞卷之二

亞墨利加より便船に得て唐土廣東に

渡りし一書士の話

ラッパスの船に上りてボンとソム者あり、勇くサンボセと付て
来りシゲリテヨウサと親しく往來し、初を命ともう
え知り、居りて十月の初に初を命ベロンの縁若
白く、往くればベロニ初を命と向ひて、方日本へ海をの
志ありしやと、初を命老あり、父母あり、所居里
を思ふの情、夢にも忘るべし、と云ふ、ベロニが白ク
然らば、家善と云ふ、斗ふ、シゲリテヨウサを



方と其子にきんとの志 有る船の如く羅わん
波とてあらしむるての帰玉の如く有る 然るに
マサトラシも船を遣返らるる彼地の業内と云い
しく志違ひ紅毛船に被地一ありやあり無比も
一艘来り飛ら由風の使らるる業内紅毛の日本も
通高らるるゆゑに家往てそ業船をれらるる由國
せん半安らるるし先善助と一ありは後ろそ船に
とてゴロンと使とてラッパスと書船と送り善助が
家を一遣しそ船と中を遣し後ろそ船に
善助を案をくサンホセに付し来りらるる善助は船

海二一

利之帝もも家色したるよそより海り居あり
あり九人集りて洋儀一値くベロシとなよマサトラシ
良法り事と講んんと云られは各中其善助初き節の
商人と別しておむきとて一航を遣はるるも案儀
此のたるなり七人の老い日く産業つらいうち
漁りも知らるるあり案儀の海路大業を遣はるる
人海りて一とれれし路とて辭と持て中
くれは商人所知しと初き節の善助とあるの宅に
はひゆり家内の業内對しマサトラシ一用事ありて
彼たをくそ何とて一とれれし路とて辭と持て中

妻子いりたりわくわく行くやし何れ初を命被流る
極子ともやんく又と家まやれぬやとてと
くら流妻子も苗をしく枯りたマサトランの勢ふ眞の徳な
むも見え替へぬ極くよく三日平其お新らしき
名殿と初は替へ一日の日の會すやも極くの徳と
たは若脚も回ト家へ逗留して在りて十日女皆
比べこの船出帆のし一若あれぬ内此母子がし
極子と推しあは解りてしやゆききるも若ん
くし衣掛とあし初を所がもとより抱きしめく
勢と別せく凡世地くハ男女を必貴城のちら

なく深く膝下き人々きく別をさほくはくはく
合抱を命に別せくはくはくはくはくはくはくはく
来り又七人の若も一匹は漢迎せく来り見送別を
く初を命若脚の面人をベロこの船は来りて見送り
凡四石積たりりしは帆棹の二本を伴て七人の即日
出帆してサシボヤりり印度の方へ向ひ帆はしはる
ゆく風強くはくはくはくはくはくはくはくはくはく
折岸の葉陀船来りありをさくはくはくはくはくはく
そゆの船はポロ子ルとて人の家へおし便はしはる
ゆゆくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
彼人ハ北亞里利



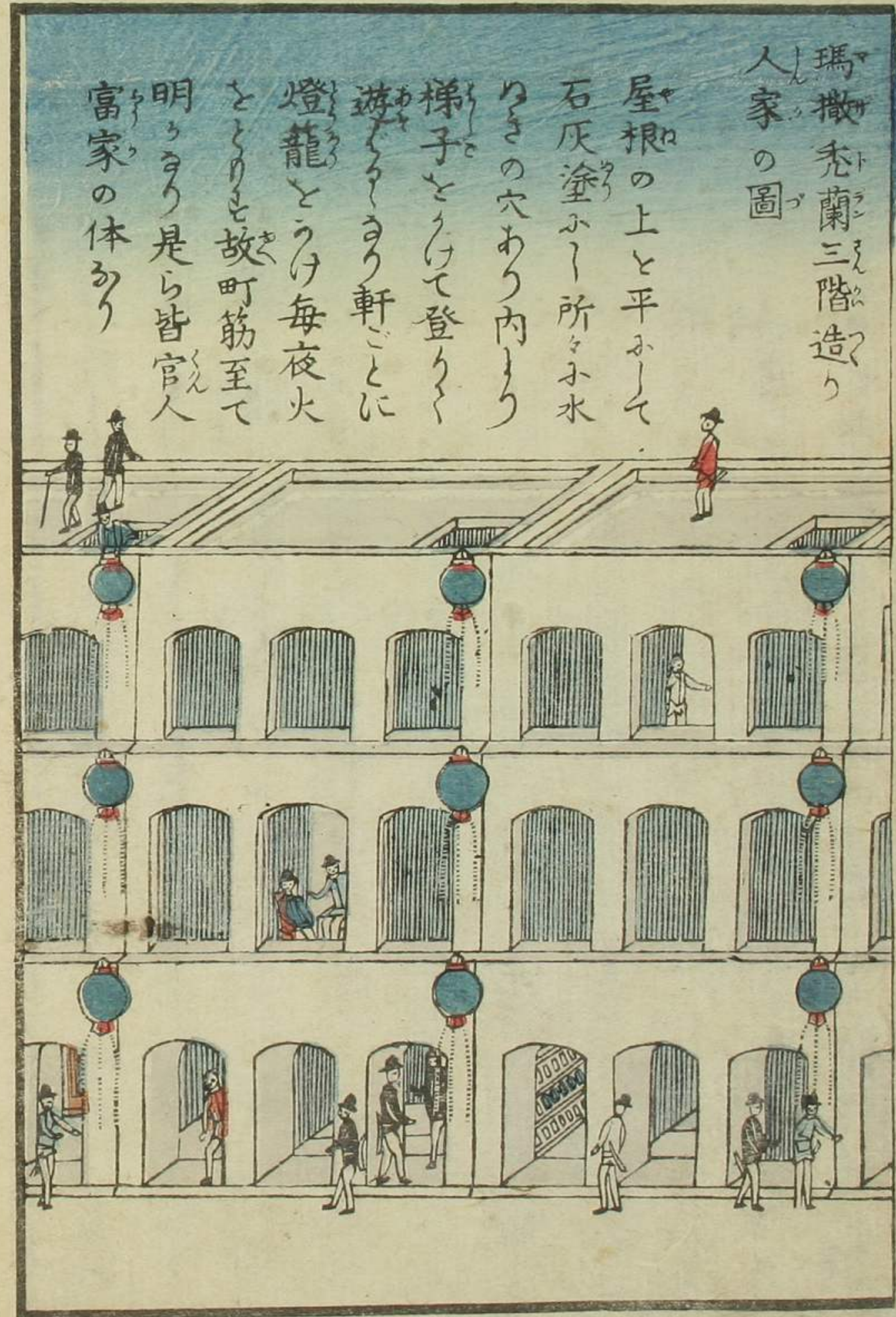
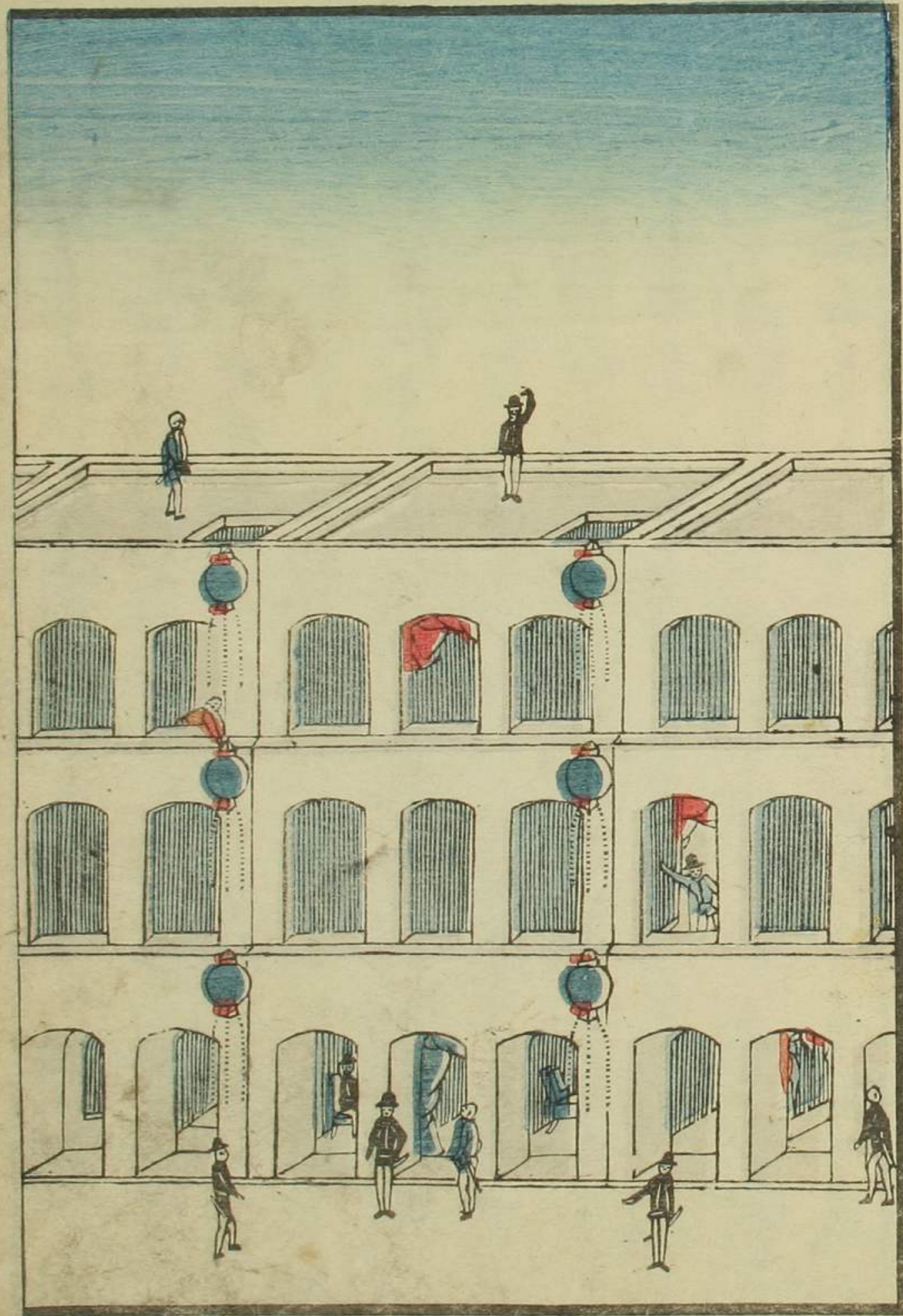
瑪^マ撒^サ禰^ネ 充^ト蘭^{ラン} 澳^オ門^{メン}の圖
所々要害の場所あり
石火夫の臺場あり



加の月も折るは度去日使臣もあらべし先少命を
 見えし有りかき後往なく彼人のあらし幸ひ
 四五日の月も度去し出帆の船わりのみ多知せし
 くれい商人ベロコに向いサンホセ小島より七人の
 船もしり難苦も多し何れせし一雨連雨し
 云々のベロコ日給地より唐去り使臣あつて一年に
 一度の二度一船此舟も乗換りしつるゆへに船を
 知りてしと海に四百里もあるサンホセし七人の老と
 迎ひし性も性返のるし十日かゝるなり彼船いふ
 ぞくゆりしとてさや深し得るよまきの使臣これ

海二二三

加玉乃志しわらぶみくよあつ流るし七人の月船
 ともつたてしと時入まじしとさきさび商人漢し今
 云甲人先親く斗しとさきさび商人漢し今
 りは若げれは日里の人とあつしわらぶみく
 建て此使臣しとさきさび商人漢し今
 朽果んしと斗り船しと心証し物しと先親
 商人のし海海志しとさきさび商人漢し今
 初を而善助と痛りりてし地しと先さあつし
 多法給し四屋の如れあし止着しとさきさび商人漢し今
 ともあつサンホセのさきさび商人漢し今



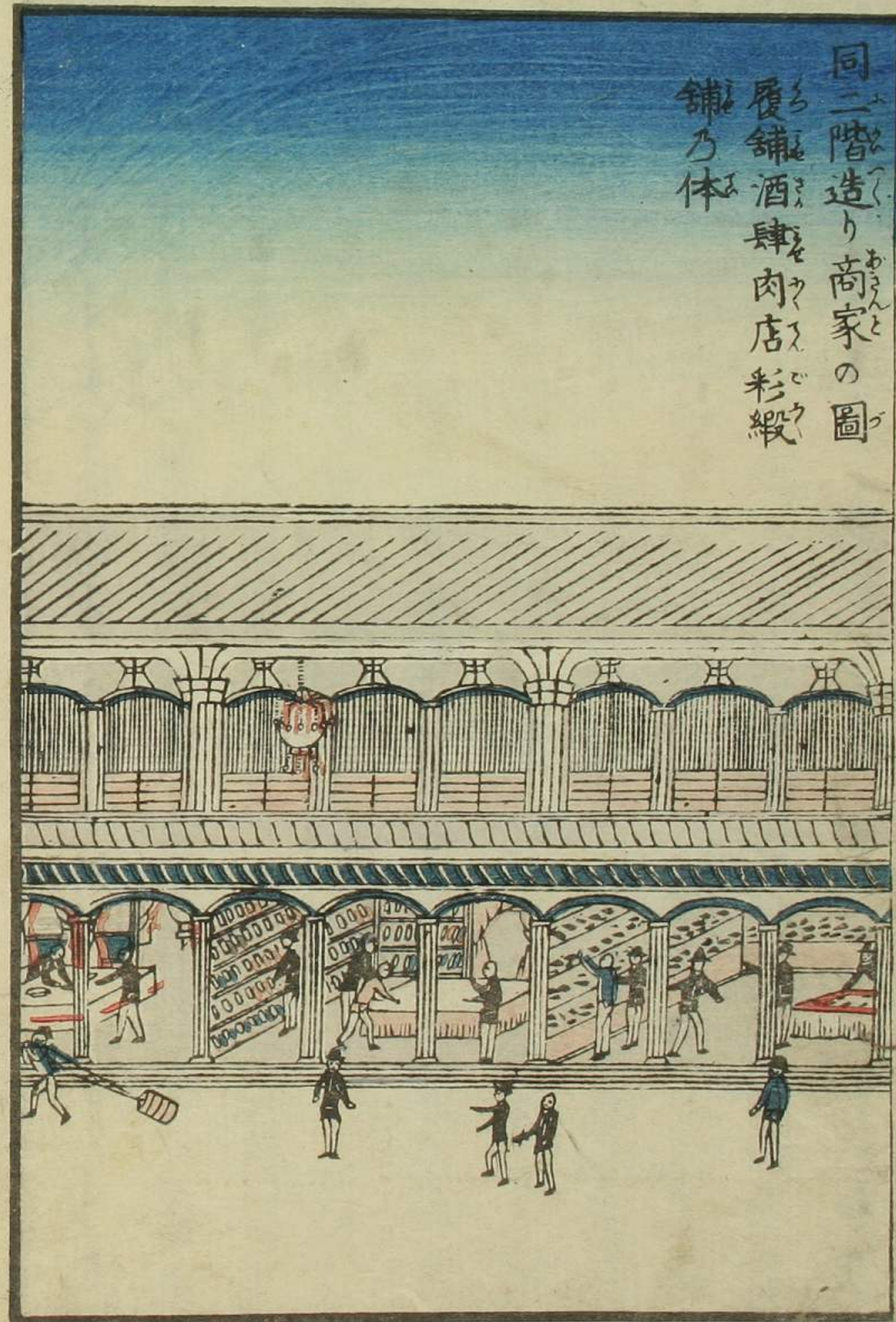
アノリカふハ
根を多し根
抄一收ハハ目
下五ニト根有
しと

此より去りて、ガサシバ、少くも、と見つて、
初ち、所より、向ひ、ま、百、由、本、と、
と、母、し、要、り、也、銀、一、万、枚、と、
と、言、さ、さ、と、一、何、と、也、止、す、も、
初、を、所、中、根、是、ま、く、
深、一、今、又、か、く、
い、も、老、と、ら、父、母、を、
来、い、い、冬、も、
く、ら、ベ、ロ、ニ、
と、ま、り、
海二ノ四

オ、り、て、
け、マ、サ、
尾、と、
振、り、
種、く、
花、布、
而、の、
連、て、
申、と、
二、三、十、
花、布、
而、の、
連、て、
申、と、
二、三、十、



同三階造り商家の圖
 履鋪酒肆肉店彩段
 鋪乃体



船をたひりしつゝ考ふるに傳ふる紙相傳し天文の
考へ海流と測り船の速速とためすし夢と云ふ
物一志りのなせし數日の何れすも何れも破者あり
返らし一何の刻も何處の方と山と月ありしと云ふは
二之日もあらず知り幾千里の及と云ふも濤入船
とす何れ下流と上流とに測るも遠く船は今之
又種々の道具眼鏡ありてゆく日輪を望んで度數尺
測り今の此船に十何分何分の所不ありといふを
つてしつゝ考ふるに船中の人初を帝尊と云ふ
唐土日本の船の山と見出さるる時自國と稱する

船にいで登り日と山と一夜の星と山と此船の
海とよ遠く大日一星をえ見若いざれの恭法とて
思ふとすや一ある日西海へて月一星と見ざる時
志公と常と云ふのそ又洋中とていつちる風浪をて
あつて車ふるもまた唯法を記しわすく礁石と云ふと
多くとせ流りりる既と云ふもいふ言て矣知し月と兼
洋中とて春を述べし湖唐土近くあれ海水のひら
濁まりてあつる不しり余は沖しを唐土の漁船
多くあり地方と離れしと數十里ゆる左帯と返す
ありて東洋水と云ふと送るしとありてサトランと出



凡七十日して唐土廣東のみならずは澳門と
 云取は為守 外國 此は三月中旬の事なりあり
 着船より三日目は初を所を人陸上とすきしる所
 是物と一而より下りてさ由たるを教なれど此は
 是よりうく持来りし浪沙六十枚と分て是物
 別れりり更りて船舟にて渡りりしは高い
 唐人最も集り来りて多くありる所なりは
 玄借過せざれば砂のよき家日本人とて出て見えたり
 うらづき有るは仔細は唐人の舟に留り
 早りと利て頂の髪をより丸く砂に三ッ打舟して

後らへ多きより衣服を今も是る唐土の唐人へ
 事りし此地人家凡一五軒高家軒と云ふ
 とも所幅をより狭くして居りたりありて
 去サ同より奥の所ト云ふして下の巻尾二階
 い板張りの屋根の志を葺きたりありてあり
 りカの人ありしをなれど此は唐人の風なりあり
 此地の人ありしは唐人と云ふは外國人入地なりあり
 此船に二十条艘ありて都して繁りたり天竺呂宋
 暎吃喇と始め諸島の人の細末なる人のあり
 唐人はかりて頂の髪をより砂に三ッ打舟して

利て考化既中とわがう居る夫々多く肥後より品
 宋の人と回航た道は天窓のうがりあひ業人ふゆり
 と余西洋人の大抵一也くまのけ家よ去れ新正十月
 漂流しつゝ加賀傾陸登の国風至那の月村の者
 惣七流之長流といふ二人又十ヶ年計日あは漂流し
 多る肥後玉川尻の者庄藏壽三希徳を序と云ふ人
 皆一室に居たり漂流の始末より今よあらまの流儀
 具さうよお便りれいしむ形よあひる初を序ハ
 正月月中旬より外家へ在の人の考と同居し食事ハ
 所持の銀沙と出して兼魚肉の類を酒の自日本風

海二八

たりし多り始て月代をきり時ハ流儀娘一か
 多りの最子此家より暦りあふる今道は月日
 妻女知まり又遠め中へ肥後の考し誘われ所々
 見おきり社へおけり一一向まなく俳園の技多
 何れも日本の英葉宗の寺院に似たり教場も
 て見物よりつえりゆたをいひあらざりて定芝居小
 ていなくおとく出り来ると雇ひてさるる本戸お
 公事しうく作しそも見ゆ貴也男女の姿は
 高人徳者りガ一も替りてなし女子をさしおサ
 きとくしとる由し知より情を是と鑑ひ

大いしく形々ぬ樹々もるお大人の長もて七七八家
 小児のいしく歩行がり膝とかぶらんとけの介を著
 ころり二月半旬より四月十日迄九十九日斗り澳門
 運留せり

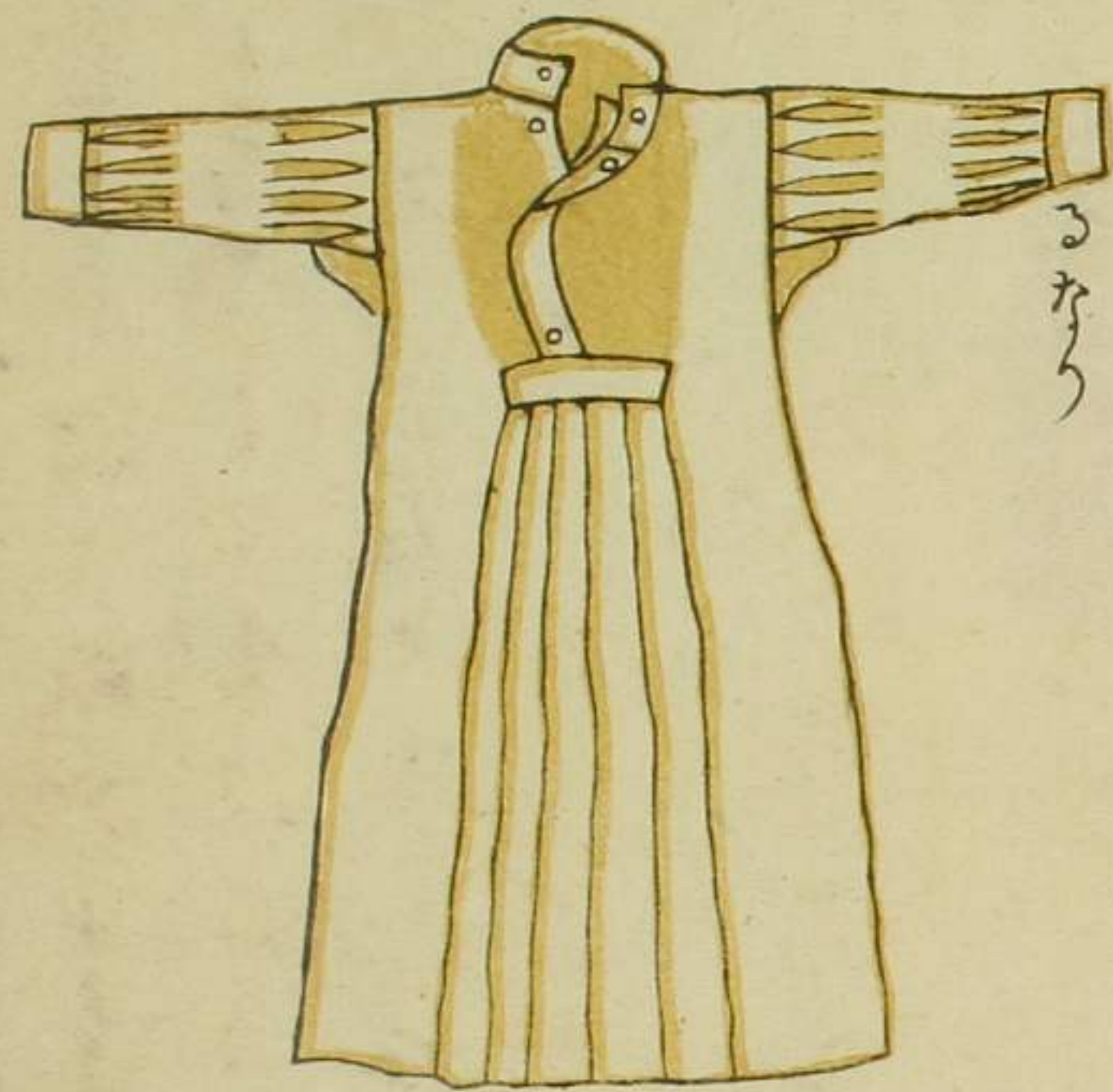
廣東より長浦小護送り日本に申し候

四月比よりりて世々より長浦へ使船ありとの事あり右
 往々の者二人初を帛と同一くしり船より乗り四月十日出
 帆と船内犯板の者いふ近き唐と西洋と戦ひ乃
 ありし跡より長浦アメリカより書いし衣服退るとの事

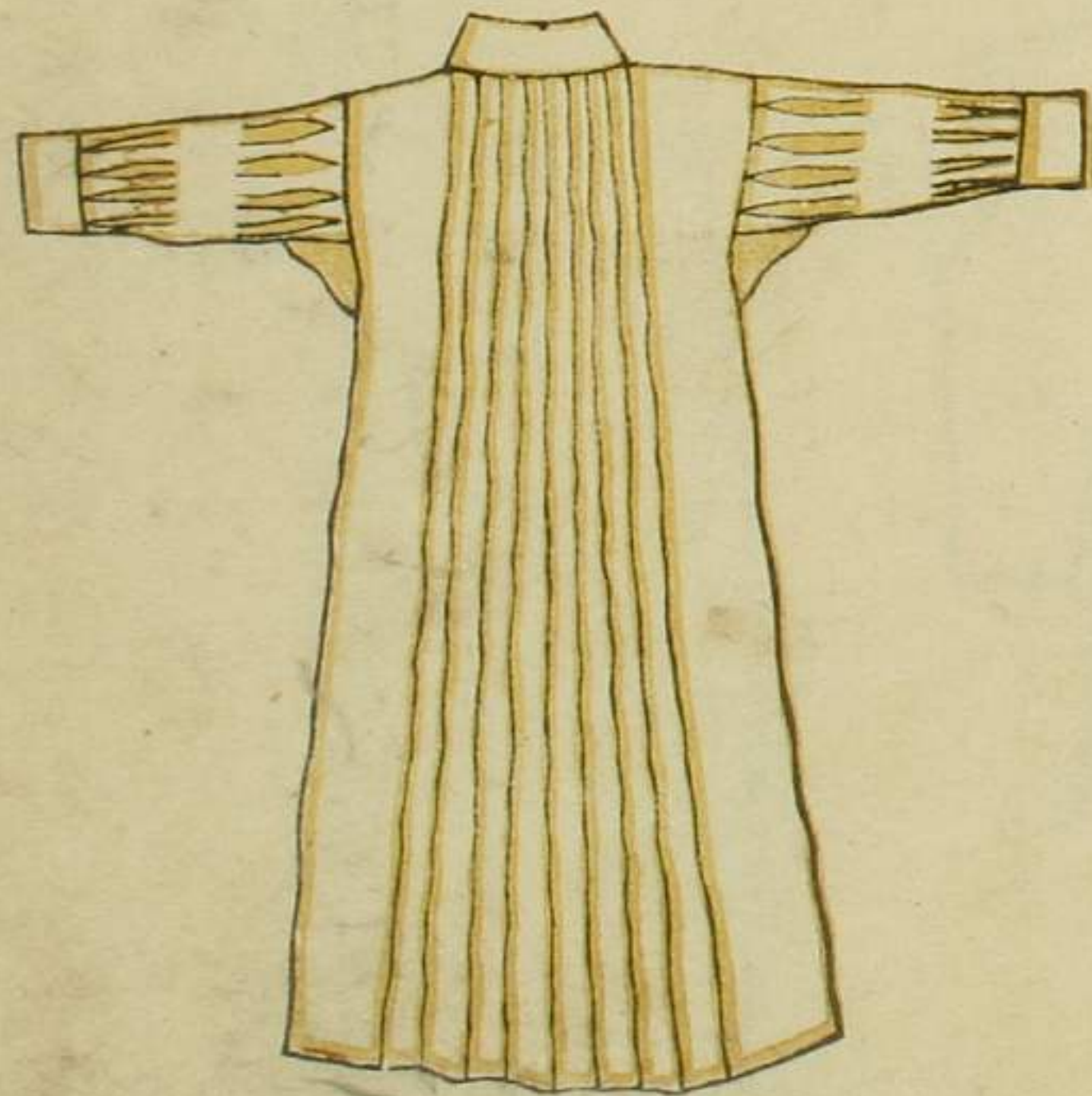
男子服飾の圖

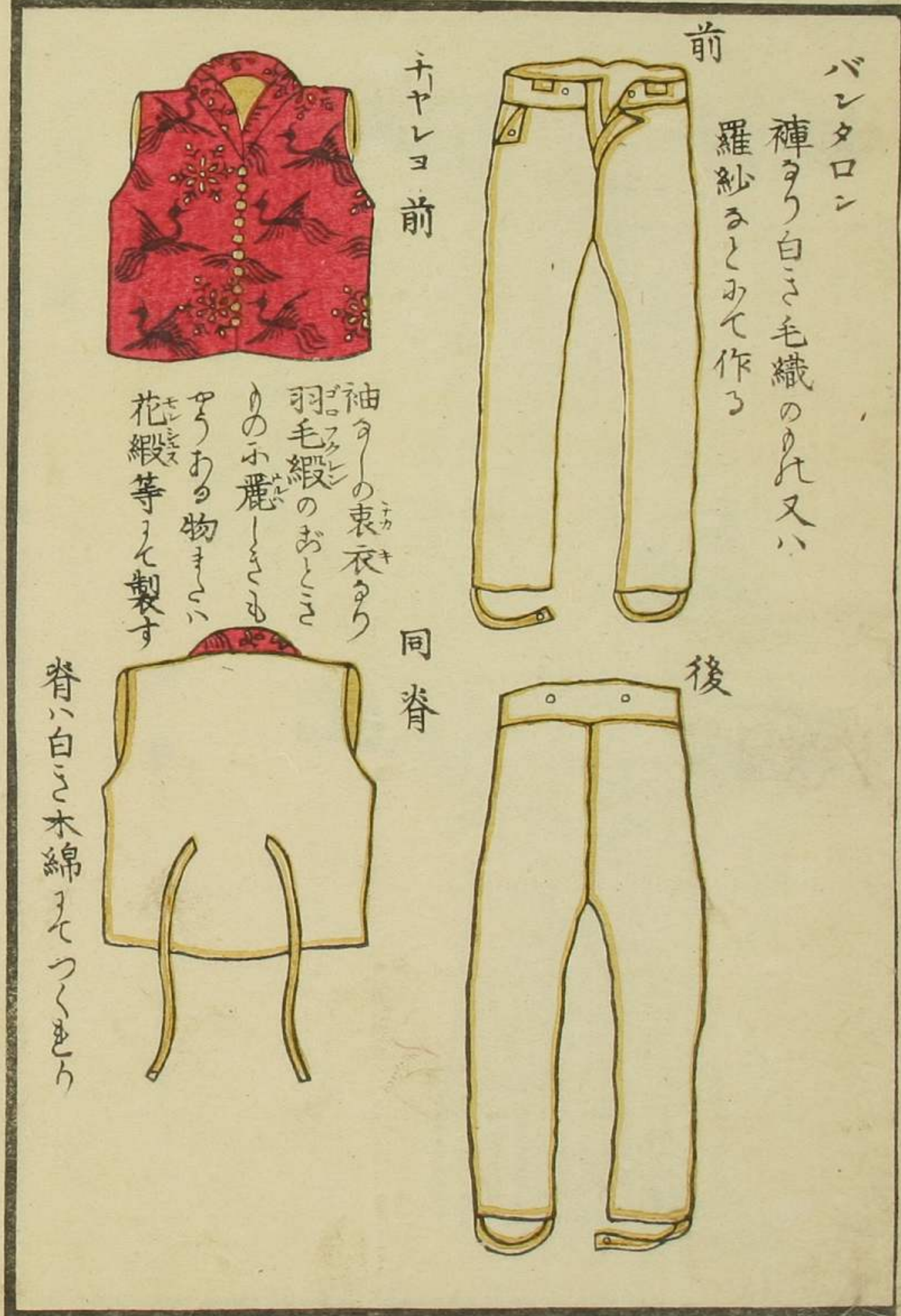
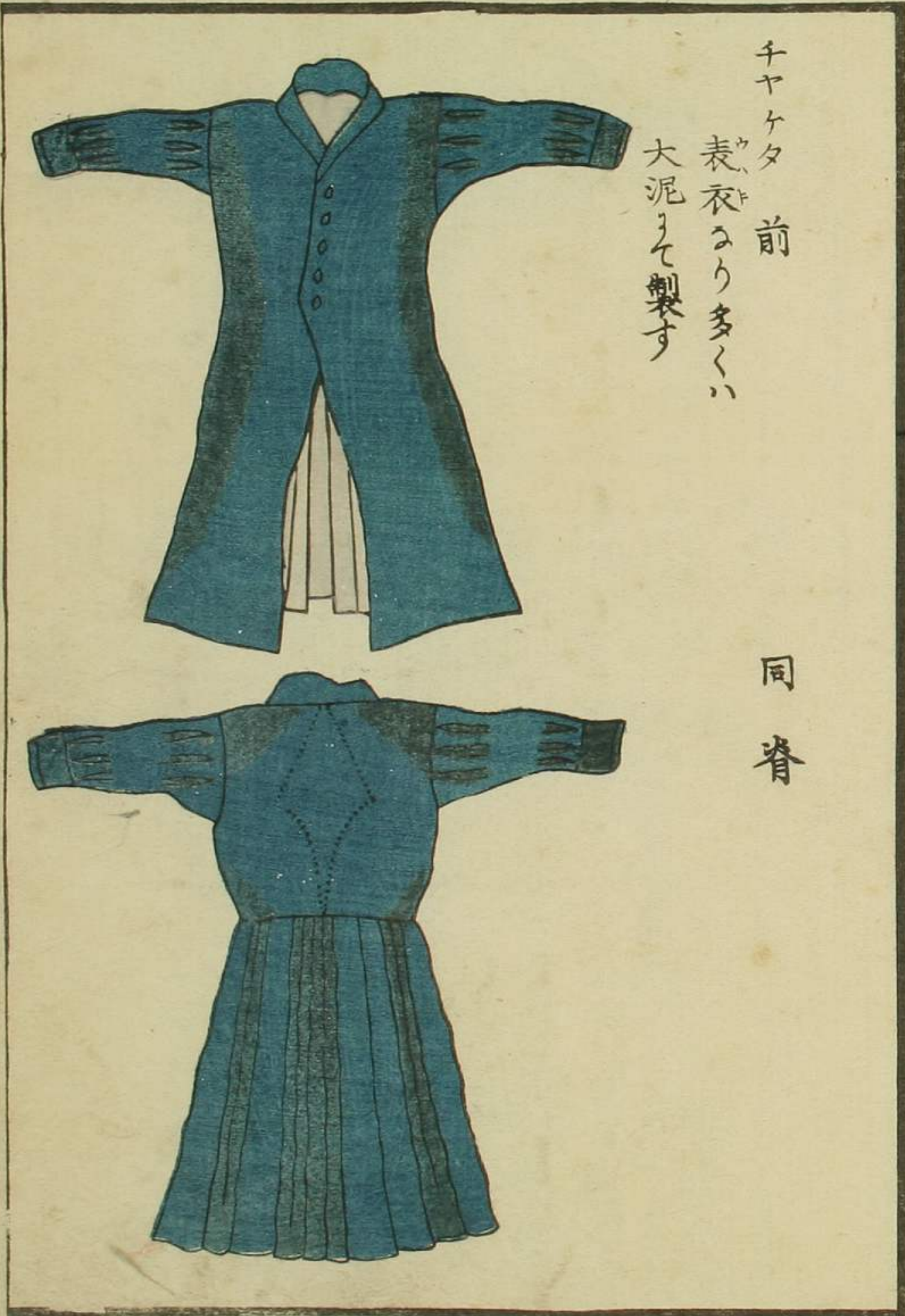
カミシヤ前

男の襦袢より白と西洋布を
 ありと鈕をひき度々着る也
 なるなり

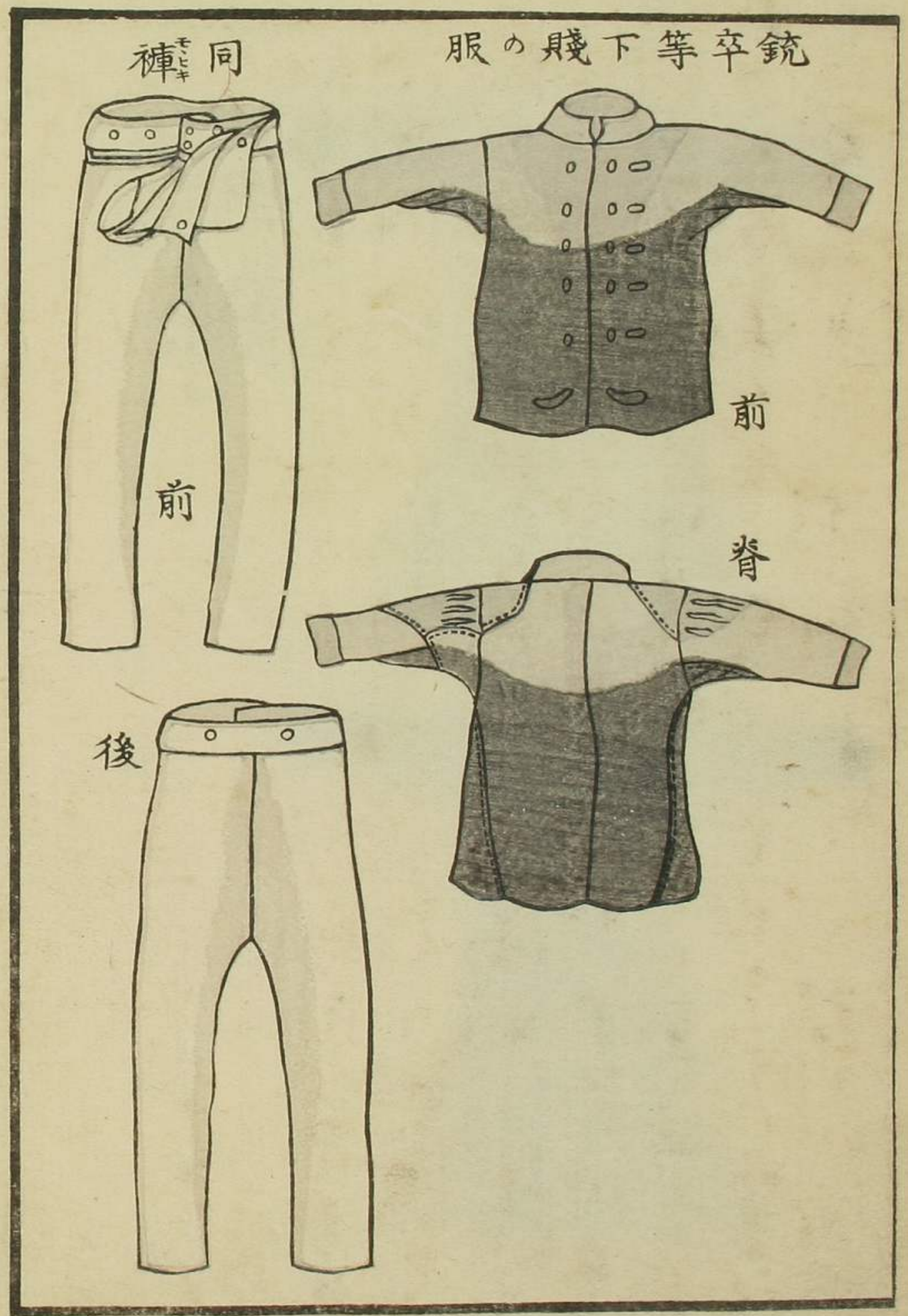


同脊





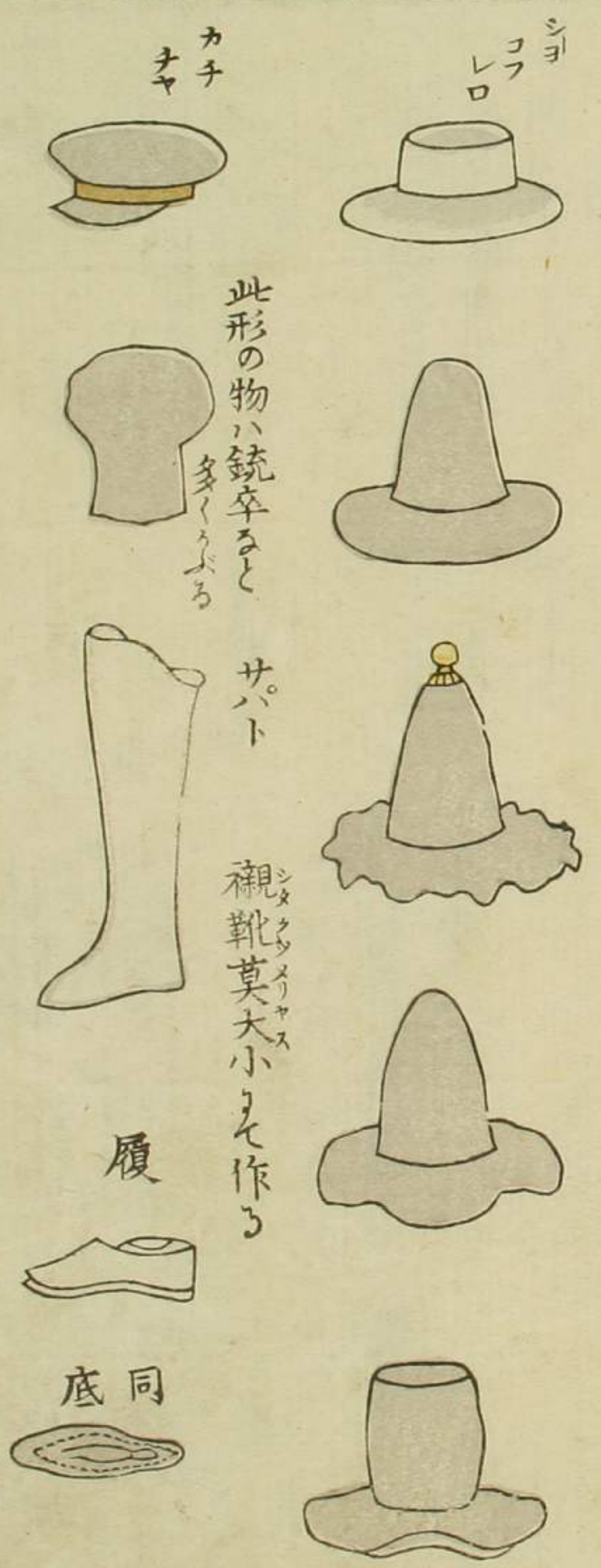
所持しつゝ西洋の間考と疑りも一にけりし時、
 船中一と云ふ事あり、其間、恒に悉く把持の者、
 多く、忽と漂流人と外玉より送り来る、
 初下は、恙なきは、有命なき陸地と獲送り、
 江戸、越前、都陽を海り、浙江、
 河、寧波、
 定法、
 後、
 灰、
 福島の月、廈門の澳、
 是迄、
 三百



里余慶門の地とすけど此嶋の人家共一軒
 のり日奉りそりしと書不たふと解之は澤船す
 事必六日六月五日慶門より東おのかと向て
 之百里も来りつゝむと思ふ所なりと船と
 テンモウといふ地暫新一交の湾洞ありて
 山此傍に人家百軒あり皆漁とみく業とする
 之と唐土の海辺近く片灘ありて山麓あり又
 磯浜あり山岳ありて見ゆまた彼に人皆一
 名と教へば又礫石ありて見ゆ法通き西の
 たる海に流し只福列の海辺のこぼれたるあり

海二ノ十

帽 種々の形あり



此形の物ハ銃卒多ク用ふる

襦靴莫大小を作る

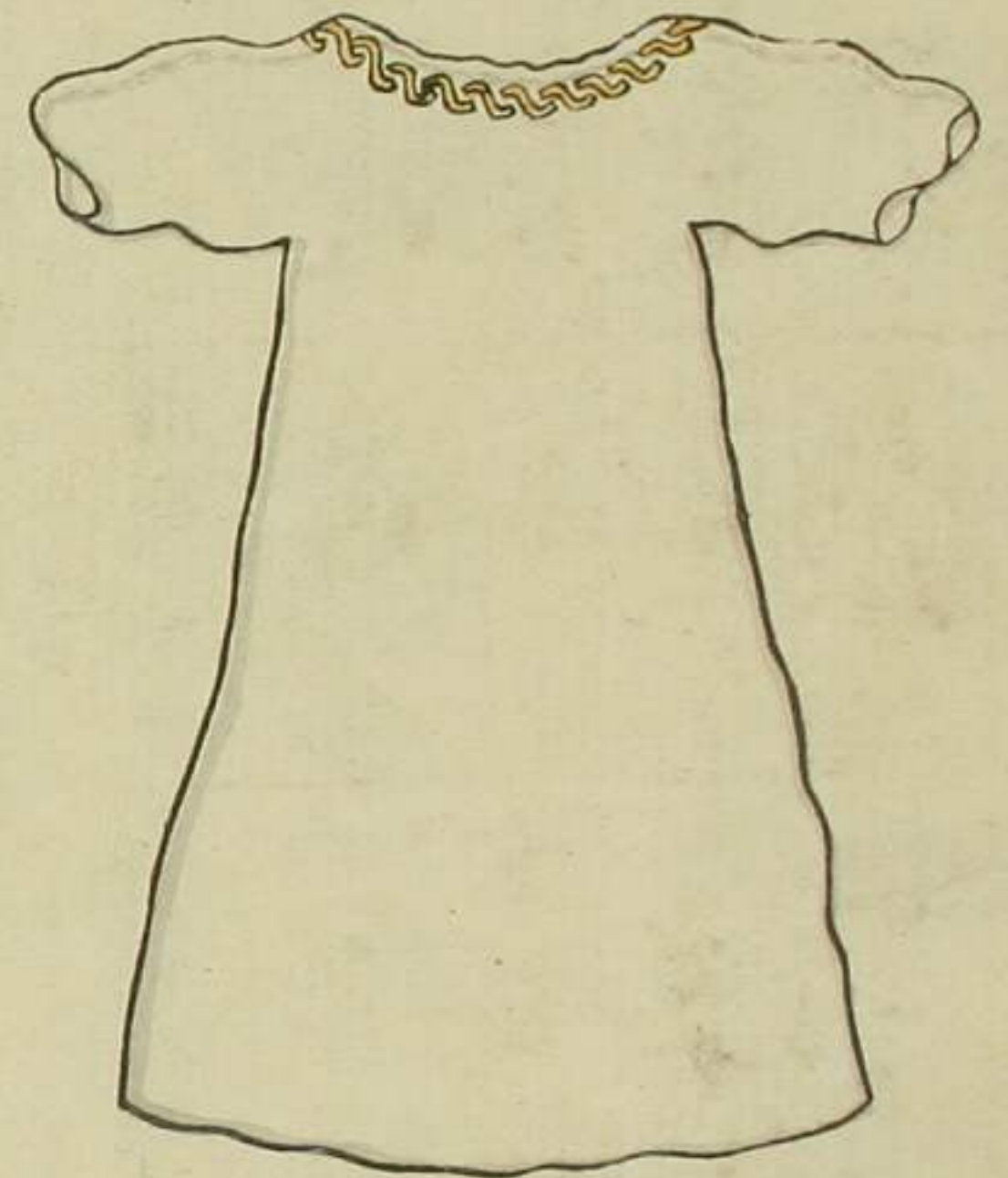
靴 ツボクツ 同底



つとも表ハ羊皮少く製一底ハ牛皮の三枚あり

婦人服飾の圖

ンソミカ



女の襯衣有り白きものありて
はく前後ともぬひつめりて
首とさーあむ穴あり腰より
上ハ襷をまゝより上ハ三重
有り

ナシガウ



女のあー小ゆくのあり
出家の腰衣のまゝ襷積
あり

五月下旬いんげんとなりてチニモウ出船六月十日ニシポウと云
美格ニシポウと云同も三百里も有ありなりて漢門
よりニシポウ迄凡そ九百里ありと傳つたへけ不ひら磨こおれ
きど町幅ちやう狭せまし日本の大坂の如ごとく縦横たてよこに橋はしを
運送うんそうする自由じゆうなりと名別なべつと陸りくへて役人やくにん持もて
送おくるはあは十日じゅうにちより運留うんりゅうをせしり左浦さうらへ
海うみまで僅わずかくも五十里程ほどあり徳島川舟とくしまがわふねを運うる
事こと定さだまりあり同日寧波ねいは出いる船ふねは初はつを命いのち給たまふ
也なりの人二人船ふねに水みづを船ふね合あへ八人乗のり能よ別べつに船ふねを
船ふねに役人やくにんも乗のりたりあり所ところを附届つくだけ乗のり用もちすも終しまり

見る所の船細く家根あり門物に橋よ橋門ありて
 左右に堤あり川幅五六十石又を甲乙石のありけり水の
 溜りたる板を細くありて左右に田島連りて水敷
 くと懸せし板之風ありてさす所の帆とけり風ありて
 時の遅くありて引けたる左に意廣く通く見ゆる
 山をたし一岡廿六日ホニテウといふありて
 舟所の役人交面してニボウの役人の帰りをりし七月
 卯年唐土より九月と還向にけり人衆大坂にりて是より
 所のやうに奇麗ありされは市中に往來の船にけり
 きたりし船を執りてありし市店の船り板をりて是より

海三十一

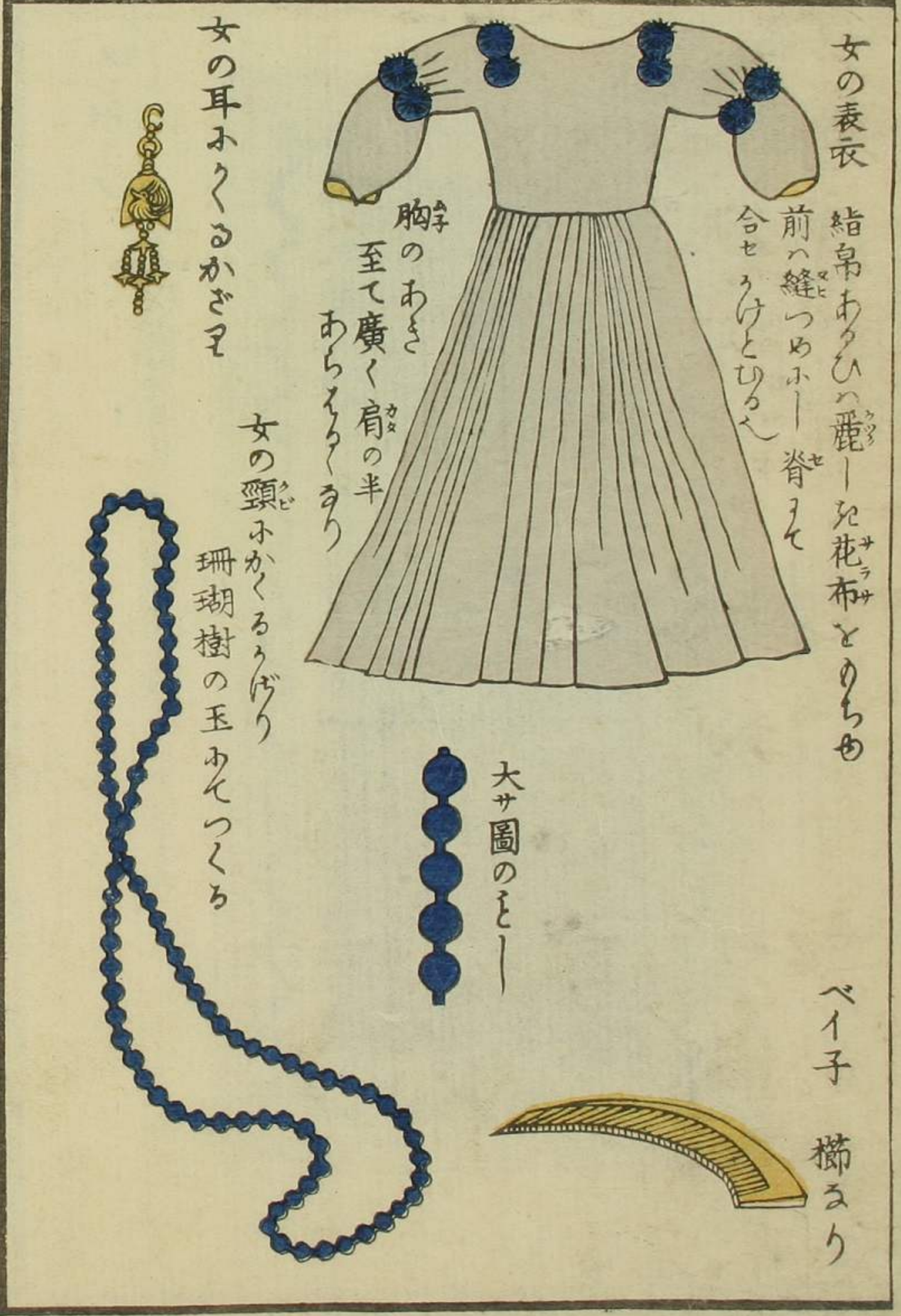
ヌレポーン

女の頭ふくぶりのまり幅四尺長さ八尺むらり



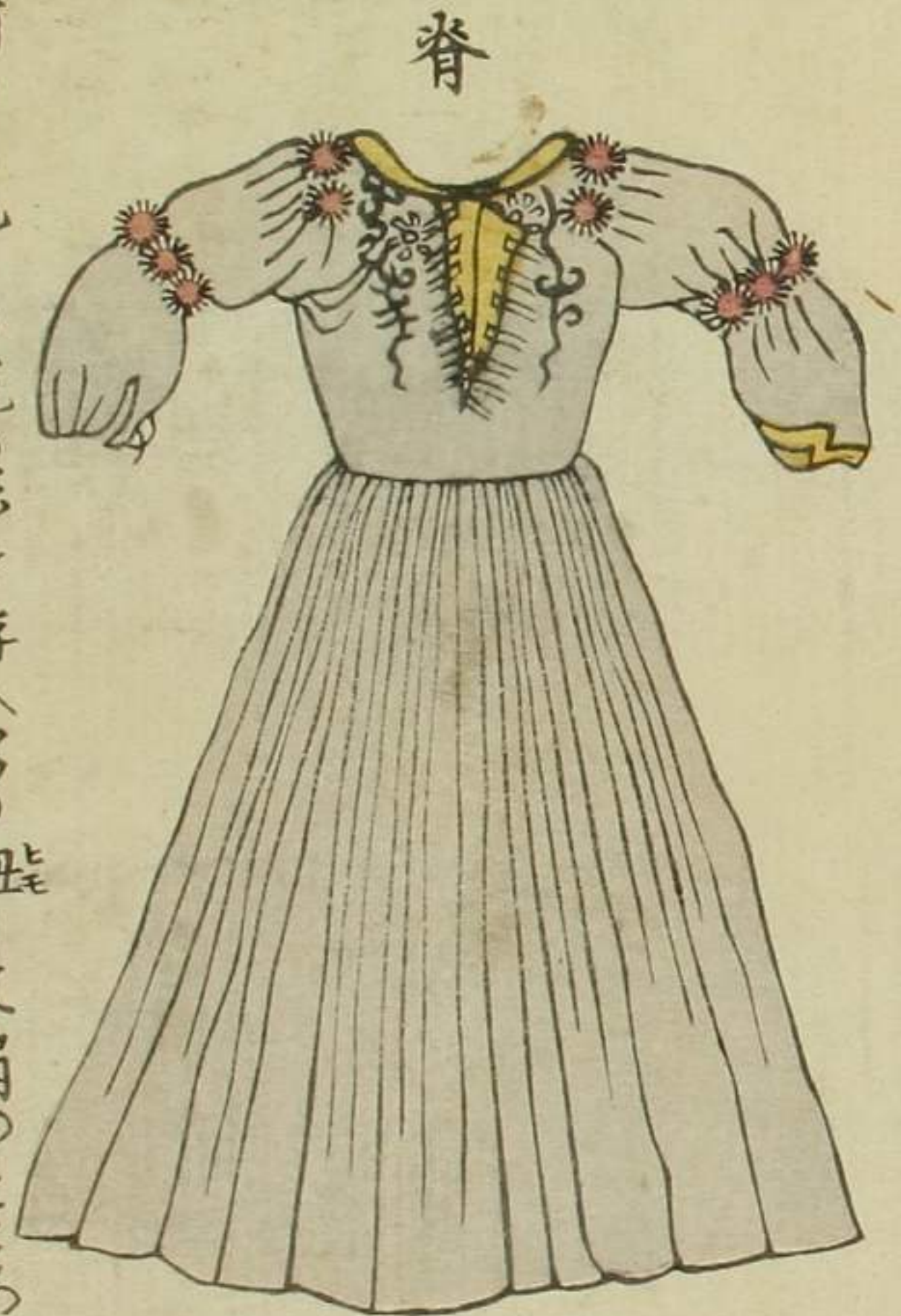
紺帛あつひ八形付の西洋布をてはるる

見知みち 駕籠かご 在あ 此こゝ 之こゝ 方かた 板いた 下した 深ふか 衣ぎ に 画え あり 藤ふじ を 手て かり 出で 行ゆ 付け
 見物人けんぶつじん 何なん 方かた 一ひと 日ひ 又また 川がわ 船ふね 出で 行ゆ 付け
 ら 了しま る 多おほ 敷しき 同どう 一ひと 日ひ 浦うら 之こゝ の 月つき 之こゝ 不ふ 改かへ と 更さら
 多おほ 敷しき 地ち 名な の 知し る 結むす ば 同どう 十じゅう 二に 日にち 在あ 浦うら 之こゝ 是こゝ
 之こゝ 二ふた 百ひゃく 里り あり 且かつ 是こゝ 船ふね 一ひと 日ひ 出で 行ゆ 付け
 加か 藤ふじ 籠かご 一ひと 日ひ 中なか 一ひと 時とき 中なか 一ひと 日ひ 中なか 一ひと 時とき 中なか 一ひと 日ひ 中なか
 葉か 月つき 一ひと 日ひ 中なか 一ひと 時とき 中なか 一ひと 日ひ 中なか 一ひと 時とき 中なか 一ひと 日ひ 中なか
 夜よ の 人ひと 一ひと 日ひ 中なか 一ひと 時とき 中なか 一ひと 日ひ 中なか 一ひと 時とき 中なか 一ひと 日ひ 中なか
 傍かたわら の 装ま 束たば を 着き 玉たま の 飾かざり あり 笠かさ を 戴かぶ 多おほ 敷しき
 左ひだり 右みぎ 十じゅう 人にん 一ひと 日ひ 中なか 一ひと 時とき 中なか 一ひと 日ひ 中なか 一ひと 時とき 中なか 一ひと 日ひ 中なか

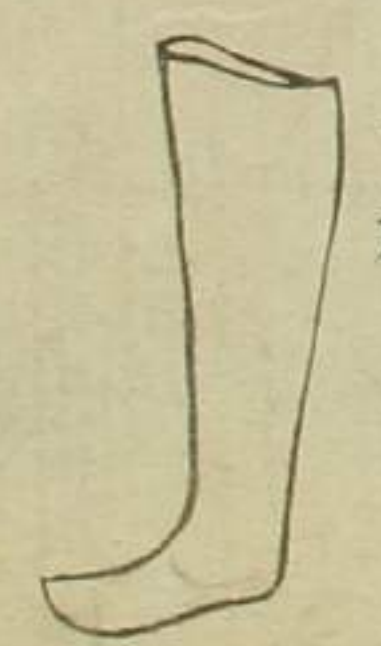


漂流の始末年月下五つを尋ねれば別をたずとせん
 流と申は流れて通つて居る家の下に流れて連れる
 け家は奥の漂流人六人程より先ん世の十月小
 川流に幸甚を蒙りて漸く西へ向りて心付連那
 半田村十吉の所の船の... 仙居領のもの三人
 石の巻石浪乳仙... 出羽屋上の志士人南船領の老を人
 之ヶ所... 初太郎等を合せて以上九人... 一箇はたして
 日本に流る半たれを今を流く思ひらる左なる
 七太郎を... 七人の老... 一... 萬...
 少何むら... 娘... 又若ぬる半... 心えらく思ひ

結めて色々の花の形と持へたる紐にて肩のところが
 肘の所と括ると圖のとく
 着る時ハ頭よりゆるしく如くゆりて首とさし出すなり



脊



女の下襪
メリヤスとつらら



女の履
上ハ木綿とありらる
皮の一枚底

吾より此正その食事朝粥昼晩に飲り二書代
 の兼らりし一とく下米あり菜豆の油揚と物
 或は太刀魚大町の孰を煮たりを食に凡十地
 一に漬り人家一萬軒と有り去れども
 日本のお度より此の意に依りて法人群集
 多し草を植て根やうり寺院も多しあり店屋も
 の中あり日本の品と賣る店あり物油ん布衣
 價値又急騰ありその紙も傘漆木素麩煙
 草味噌の如き日本のお多しあり九月八日
 斗らば善助來たり根子いりあり為多し二月申旬

ソウホレヌ



一種圖の如く四角なるあり

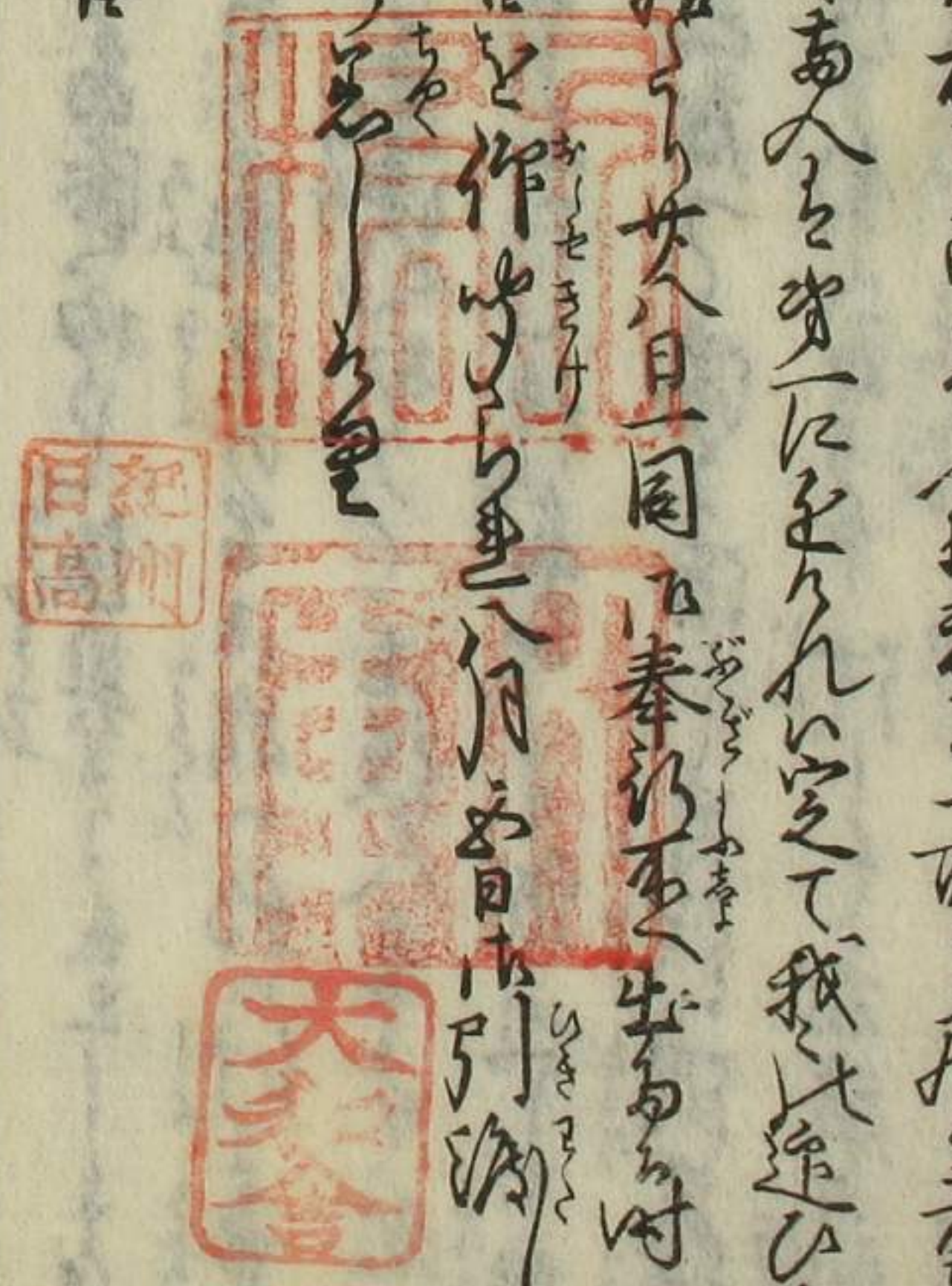
澳門長總吏より長との海海を辱く舟中より西より
 送し今日漸く西より西よりと速初を希し別々
 格別の銀銀にたりしりしを人々聞し左に細くして
 有るまを各々す証撃しと保し保しひりりる浦小
 留るすおしと百三十日之間より一たり居るまを
 町内歩りのをり必し役人付添く細細を有り
 思ふ指しえおきるす終るに相土月十六日、奥羽の
 者五人志助長次第再々書き文藏と深宮より
 船より来りて出帆高女之日、初左節若ぬ所高船
 承之節往意以上四人故泉来りて小舟より出帆す

奥七所を浦 長浦逗留申送し本條浦を一回歸入一扱
 其之當一ツ外にあのむを必征しりき信りし一是し
 唐人の船より一色相中ゆきあり左則書ひて
 持油しり相厚土の人と暇と告げ脱と解く漢を
 出る世取来りて人約五十五人初を御ありと船の旁に
 網を垂りて西より度く事とありて之を漢に
 出たりと信りしとらんを名をぬれぬがの船は向く
 其方よりゆきしとる用ありとて由し教は磁石
 爲れ一向に竅るは是れ船取しりて其方よりゆきしとて廿二日
 出帆しりて日毎に去るまを走りて五時の西よりと



父母の福を乞ふ方々いふ年姪
 ありたり既今辰の年より移り春色に
 女五日より番の者より番の内河
 来りきつと有らる初を思ふ
 幸玉の人の善物と我とあ人と
 んと心の内よりあつと女日
 別より逆ひし事し由と作
 お故同世日故々い降り

海外異聞卷之二 終



海二ノ五

